

# 「理齋旅日記」「理齋日新録」

## と著者志賀理齋について

鈴木圭吾

本所所蔵の志賀理齋自筆本『理齋旅日記』『理齋日新録』を紹介するに際し、理齋の著述を一覧して、この二書がそこに占める位置を確かめることにする。著述目録は二三を見ることが出来るが、ここでは『国書総目録』著者別目録(岩波書店、昭和五十一年刊)に依ることにする。

○所在(所蔵者)の判明する書目。ただし、史料編纂所以外の所蔵は略した。

- 三省録 前編三卷附言二卷 後編三卷付録二卷 ㊟教訓 ㊟日本経済大典三六・日本随筆大成二期八・日本随筆大成第二期
- 祝融録 ㊟災異
- 楚天之久連 二冊 ㊟記録 ㊟文政12
- 東都六阿弥陀考證 一冊 ㊟考古
- なかなかの友 ㊟随筆
- 日光参詣旅行記 一冊 ㊟紀行 ㊟文化5
- 筆のたはふれ 一卷 ㊟随筆
- 御園の記 一冊 ㊟庭園
- 理齋翁子弟戒 一冊 ㊟教訓 ㊟天保11

理齋帰路旅日記 二冊 ㊟紀行 ㊟寛政12 長崎より江戸に至る  
 理齋随筆 ㊟文政6 ㊟随筆大観二・昭和版帝國国文庫名家叢筆集・続帝國文庫名家叢筆集・日本随筆全集二・日本随筆大成三期一  
 理齋旅日記 ㊟紀行 ㊟寛政11 ㊟国会(一冊)・東大史料(自筆四冊)※江戸より長崎に至る  
 理齋日新録 三十冊 ㊟日記 ㊟東大史料(自筆)  
 ○所在不明のもの。『総目録』は、以下の全てを「漢学者伝記及著述集覧による」としている。

- 埋木物語。燕雀談。老の線言 十二卷 ㊟随筆。勸学文和解 一卷
- ㊟教育。官暇録 五卷。堪忍の守 一卷。衣更着紀行 一冊。君が恵 一冊。座間狂歌集 二卷 ㊟狂歌。座間狂文集。座間滑稽古一卷 ㊟戯文。忍艸 二卷 ㊟雑記。信綱録 二卷。聖堂試文ととましり 一卷。続武篇類聚 五卷。朝鮮記遺漏 一二卷。長崎帰路日記 一卷。長崎旅日記 一卷。日光紀行 一卷。日新録 五卷 ㊟漢学。筆塵 四卷 ㊟随筆。眞間紀行 一冊。耳の枝折 十卷。薬法伊呂波韻 七卷 ㊟薬物。弥生の夢 一卷。夢の跡 二卷。宵なから記 一卷。理齋戯筆 五卷。理齋狂歌狂文集 七卷 ㊟狂歌・狂文。我菴話 一卷 ㊟随筆。

### 「理齋旅日記」

「理齋帰路旅日記」 二冊 \*長崎より江戸に至る  
 「理齋旅日記」 東大史料(自筆四冊) \*江戸より長崎に至る  
 『国書総目録』には二つの書目として記載されている。しかし、実は江戸から長崎へ向う「理齋旅日記」上下二冊と、長崎から江戸へ帰る「理齋帰路旅日記」全一冊、それに「理齋帰路旅日記附録」全一冊の四冊が一帙に収められて、「理齋旅日記」東大史料(自筆四冊)を構成している

のである。したがって、この他に「理齋帰路旅日記」二冊があるわけではない。「理齋志賀先生著述目録」<sup>(2)</sup>に「長崎旅日記」巻巻、「同帰路日記」巻巻と記載され、他の理齋著述目録にも長崎旅日記と長崎帰路日記の二書に分けてあるために、この様な行き違いが生じたものであろう。

第一冊 表紙に「理齋旅日記上」。全六十一丁。巻首に藤原貞裕撰「理齋先生旅日記序」があり、続いて理齋自筆の序がある。佐渡奉行朝比奈河内守昌始が寛政十年五月十六日長崎奉行に転じ、理齋も長崎奉行手附書方出役に任じられ、奉行に随行して長崎に向うのであるが、その道中の日記である。

「七月廿二日 晴 東方白みわたる頃、よそほひをなし、墨水の辺り本庄権のもとなる埋堀の菴を出立、四百里に近き長崎の地に歩をめぐらす……」の書き出しで始まる。旅立ちであるから友人から送られた送別詩を掲げている。また行程中の随所に奉行朝比奈昌始を始め、一行中の人物の漢詩や和歌を書き記している。名所旧跡、風景、名物等を興味深く描写しているのは並の旅行記と変らない。同年八月十五日室津に至るまでを収める。

第二冊 表紙に「理齋旅日記 下」。全四十丁。前冊と同様藤原貞裕と理齋のまったく同文の序を附す。貞裕の序も自筆と思われる。

八月十六日室津を出立し、九月一日長崎着までを収める。本冊の末尾に「皇和寛政十戊午年十二月十七日書畢」長崎奉行手附書方出役 小普請組阿部大守組 志賀鍋太郎(花押)<sup>(5)</sup>とある。また巻末に草加定環の跋、桜田質の跋がある。

第三冊 表紙に「理齋帰路旅日記 全」。全四十五丁。翌寛政十一年九月任期満ちて長崎を出立するが、その辺の事情を『事実文編』<sup>(6)</sup>は次の様に伝えている。

「十年崎陽の筆吏と為る、蕃船輻輳し吏の珍器奇玉に汚がるる者多し、理齋永く其地に在るを欲せず、任満て帰る。」(原漢文)

九月二十九日に長崎を発し、十一月十五日江戸に帰着する。

第四冊 表紙に「理齋帰路旅日記附録 全」。全八十丁。第三冊の巻首に「寛政十二庚申稔夏六月 牛渚理齋識」と書した「叙」がある。

「客心日月をあらそひたりしも、いつしか帰れる年の秋をむかへ、まちわひし故郷の旅に趣く事になりぬるは寛政十一己未年九月廿九日なり、斯て去年の秋見残し侍りし處またはかよひ来さりつる道なの、おもしろしと三ツ四ツするしたる、またやつかれか長崎にありし時、あるは見あるは聞たる夏めつらしと思へるを撫ひ集めかい付侍れは、また一つの艸子とはなりぬ、是やねふりを覚すなかたちともならむもの歎」。

これで解るように、五十条の見聞を集めたものである。いくつかの例を挙げれば、二長崎方言の話、六奠海風昆布の話、八黒坊の話、十四通事の家系の話、三十二踏絵の話、三十八和蘭陀の正月の話、四十六紅毛難船の話等々。

#### 「理齋日新録」

理齋が文化五年(一八〇八)より記し始め、天保九年(一八三八)まで三十年間の日記である。そこに、日付によってはその日見聞した様な話柄を随筆として書き加えている。全三十冊の冊別と年次は次の通りである。

- 一(文化五年)・二(同六年)・三(同七年)・四(同八年)・五(同九年)・六(同十七年)・(同十一年—十二年)・八(同十三年)・九(同十四年)
- 十(同十五年(文政元)年)・十一(文政二年)・十二(同三年)・十三(同四年)・十四(同五年)・十五(同六年)・十六(同七年)・十七(同八年)・十八(同九年)・十九(同十年)・二十(同十一年)

年)・二十一(同十二年)

二十二(同十三(天保元)年)・二十三(天保二年)・二十四(同三年)・二十五(同四年)・二十六(同五年)・二十七(同六年)・二十八(同七年)・二十九(同八年)・三十(同九年)

「理齋志賀先生著述目録」には「理齋日新録四十巻」とある。現在は三十冊であるが、一、二、三、四、五、七、十一の各冊は六月までを上とし、十二月までを下とし、それぞれが合冊されているので、元の姿にもどせば三十七冊になる。なぜ四十巻としたのかは不明である。しかし、概数でそれに近いので、「目録」の段階ではおよその数を掲げたものかもしれない。

理齋がこの日記をなぜ書くようになったのか、その理由は第一冊の巻頭にある「理齋日新録のはしがき」に自から語っているので、長くなるが全文を引用しておく。

理齋日新録のはしがき

一予数十年の間日記を委く書き来たりし處、次女なるもの寛政十年歳六月十八日中暑のやまひにて、九歳を一期となして身罷りぬ、しかりしよりこのかた、それまでの日記の中に渠か生下せしよりの亻とも往々に残りてあるを見るに、なをおもひ出すに、還らぬ事とは知なから、泪のなかつたちとなるにまかせて、みなこと／＼反古となしてかは屋に捨ぬ、それ／＼しては日記かくことは止たりしか、つら／＼また考へ見ればこれ大なるおろかなるわざにして、誰かはこのよに永くあるべき、責ては筆のあとのみは身後にのこれる物にて、殊にはあつまかゝみ、伊豆日記、さてはまた白石先生のおりたく柴の記など、其ころを今見る如くなれば、予か如き不学のものしるしをきたるも、後の世に至りなは少しは昔を忍ぶはし共ならむ歎と、また今とし文化五辰年を記しそむるもの也、

一みつからしたしくその事に触ものもあり、また人よりして伝え聞たるもあり、いつれめつらしとおもえるをは、意にまかせしるしたるなれば随筆に近き處多し、

一暇ある折から、書肆より借りて見たりしふての中よりして、見るに益ある事とも備忘のために記し留めぬ、これもまたひとつには志同じき子孫等か、春雨秋の村雨杯のころ、つれ／＼をなくさむるよすかにもなるへしと、なにくれとなくしるしをくもの也、

牛 渚 散 人 識

○朱印二顆  
ヲ捺ス

随筆を付した日付と題名を第一冊文化五年の三月を例にとって列記してみる。

三月二日尚齒会、四日菅公の御辞、六日山崎子女弟、十一日南部の鯨、十一日貫流の首途、十二日書物のこしらへ方、十六日雀合戦、十六日病犬のくすり、十九日蜀山人の話、二十四日覚樹王院隠居の文、二十四日平山氏の詩歌、二十四日三橋氏の文、二十四日妙法院宮上ル歌、晦日鈴木子の弓銘、等である。この年の随筆は十月が二十二条で一番多く、正月が二条でもっとも少く、一年間で八十三条に及んでいる。他の冊も大体同様である。

内容の書き具合をみると、毎日の条の間に空白のある部分があることはあるが、あとからの書込や訂正の箇所がほとんどみられない。これはこの前にメモの様なものがあり、毎日記事がまると、整理清書していったものではなからうか。筆跡は、「理齋旅日記」の自序、「日新録」の「はしがき」とその本文の字を比較検当して、理齋の自筆と考えて間違いないと思われる。

志賀理齋、名は忍、字は子堪、通称鍋太郎のち理助と称した。理齋は

その号で自らよく用いた。天雞山人、叡北山樵、我楽多老人とも号している。宝暦十二年（一六八六年）生れ。伊賀者の家として代々幕府に仕えた。理齋は幼少より書を読むことを好み、長じて博覧宏通読まざるどころなしと称せられた。天明年中西丸の伊賀者に推挙されたが、病と称して応ぜず、もっぱら書を読んでいたという。寛政十年、長崎奉行手付書方出役として長崎に赴く。三十七歳であった。この道中往還の記録が、「理齋旅日記」全四冊である。文政年中奥詰となり、天保三年江戸城の金奉行に任ぜられ幕府世臣に進む。夫人野口氏は同年で、夫妻の琴瑟相和すところは、『事実文編』が伝えている。前述のごとく著書が多数ある。天保十二年（一八四一年）没。年八十。

明治以降、理齋の博覧強記は人の認めるところとなり、著書『三省録』五卷（天保十四年江戸にて刊）は、『日本随筆大成』第二期第八卷（昭和三年）として、又『日本経済大典』第三十六卷（昭和四年）として刊行されている。『理齋随筆』は理齋生前に出版され、これも明治以降は『随筆大観』第二（明治四十三年）、『文庫名家漫筆業』第二十三編（昭和四年）、『日本随筆全集』第十二卷（昭和四年）と回を重ねて刊行されている。しかし、今次大戦後は、理齋の評価はかなり変化したようで、河出書房の『日本歴史大辞典』（昭和三十三年刊）にも、又吉川弘文館の目下刊行中の『国史大辞典』にも「志賀理齋」の項目は採用されていない。だが、「理齋旅日記」は遠国奉行が任地へ赴任する道中の様子が詳細に解るし、「理齋日新録」は、何はともあれ大冊であり、文化文政天保の三十年にわたる世相の記録である。いずれも、資料価値は高いというべきであろう。

### 右二書が本所に入った経緯

「理齋日新録」は、昭和三十一年六月三十日、人見氏なる人物が本所

に持参され、七月七日の第十三回委員会に於て購入を決定した。記録には「人見氏より二万円にて可なりの返書あり、購入決定。ただし『隔世の感あり』の文句あるにより、二万五千円にて購入することとせり」とある。

「理齋旅日記」は古書肆浅倉屋から持ち込まれたもので、昭和三十二年四月一日（土）臨時緊急委員会（二時二〇分、於会議室）で、購入が決定した。受入簿には二万円とある。

前後十ヶ月程の間に、江戸時代の名のある人物の自筆本が二部、保存の良い美本がひとつ所の蔵本となったのである。しかもまったく別途の経路で入って来たのである。いかなる奇偶によるものなのであろうか。

### 〔注〕

- (1) 『漢学者伝記及著述集覧』・『国学者伝記集成』・「理齋志賀先生著述目録」（天保十四年刊『三省録』の末尾にあり、『日本随筆大成』第二期十六に転載されている）等。
- (2) 注1参照。
- (3) 第一冊の本文中に「朝比奈侯家臣林貞裕」とあるが、その他は明らかにし得なかった。
- (4) 朝日奈昌始。寛保三年（一七四三）生れ。寛政元年四月三日遺跡を継ぐ。寛政三年十月西丸目付、同五年本丸、同六年閏十一月佐渡奉行、同十年五月長崎奉行、七月朔日従五位下に叙し、同十二年正月新番頭、文化二年十二月小普請組支配、文政元年十二月大目付、同八年西丸御留守居を歴任して、同十年（一八二七）四月二日卒（柳菅補任・寛政重修諸家譜）。
- (5) 草加定環については多少の知見は得たが、桜田質が朝比奈始昌の家臣であること以外を知り得なかったため、林貞裕の事歴等とともに後日を期したい。
- (6) 『事実文編』巻五十四、「志賀理齋君壘配野口氏墓碣銘」。関西大学東文学術研究所資料集刊十、三、昭和五十五年刊。